
バカと軍事オタクと召喚獣

アゲハ蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと軍事オタクと召喚獣

【Nコード】

N1588Z

【作者名】

アゲハ蝶

【あらすじ】

この物語は明久Aクラスです。Fクラスがめっちゃくちゃ空気になってます。それと中坊が書いています。それが嫌な方は読まないことをおすすめします。多分不定期更新です。

オリキャラ設定1（前書き）

この物語は、作者の趣味全開で書いています。それが嫌な方、またはついていけない気がしない、という方はブラウザボタンの戻るをクリック。ですが一応説明は書くつもりです。

オリキャラ設定1

設定

・石井拓馬^{いしいたくま}

173cm 中肉中背

趣味：ゲーム（FPS、レースゲーム）

2つ名：現代に蘇った山本五十六

好きなもの：銃、戦闘機、軍艦（第二次大戦の時の物）、甘いもの
嫌いなもの：虫、辛いもの、苦いもの

得意科目：日本史、世界史、現代国語（430→620点）

苦手科目：保健体育、古典、英語W（150→220点）

・本作品の主人公。木下家や明久とは幼馴染みで、料理が出来るが明久には負ける。

姫路の料理を食べても少し手足に力が入らなくなるぐらいで済むくらい体が丈夫。

性格は優しいが一度戦闘が始まると優子や秀吉たちが止めない限り戦闘狂になる。基本は怒らないが明久たちが傷つけられると一気に凶暴になる。成績はAクラス上位に入る程で、教えるのも上手く、その実力は明久と秀吉をAクラスに入れる程。^{エラカン}銃を持ってきていて、それを使用した時の実力はFFF団を10分で制圧出来る程だが、武器がないと秀吉にすら負ける。知略に富んでおりその実力は雄二と互角。

・召喚獣

姿は第二次大戦の時の日本海軍と一緒に

武器：M1ガーランド、M1A1トンプソンの内のどちらか1つと
無反動砲1つ

ガーランド、トンプソン：リロード一回につき二点消費、無反動砲

一回につき10点

腕輪（一対一の時は使用不可）：航空支援・・・五分に一回使用可
点数の半分を消費。最高でも単教科で
200点、総合科目で2600点まで消費する。機銃掃射・・・一
回につき100点分の攻撃力がある。全部で五回出来る。爆撃・・・
一回だけ出来る。500点分の威力と半径2mの加害範囲がある。

機甲師団・・・二分に一回使用可。点数の約三分の一を消費する。

一台につき十発、全部で五台出現、一発につき十点分の威力と半径
75cmの加害範囲がある。

艦砲射撃・・・十点だけ残して他の点数をすべて消費する。一発に
つき450点分の威力と半径5mの加害範囲がある。一回につき
8〜12発、三回撃つことが出来る。射程が新校舎の端から旧校舎
の端まであるが水のそばでないと使えない。（トイレや水道など）

オリキャラ設定1（後書き）

主人公が若干チートな気もするが気にしたら負けだと思っている。

質問：みなさんの一番好きな授業といえバ？ 作者は社会（歴史）が好きです。

こんな小説で大丈夫か？ や一番いい小説を頼む。とか、そういう意見やダメ出しをしてもらえるとうれしいです。

第一問（前書き）

バカテストは基本しません。

第一問

オレらがこの文月学園に入学してから二度目の春が訪れた。

今オレらの頭は今年一年を共に戦い抜いていく戦友と教室…まあ要するに新しいクラスのこと一杯になっていた。

「吉井、木下、石井、遅刻だぞ」

玄関の前でドスのきいた声に呼び止められる。

この声は、まさかッ！スネー…もとい、鉄人ではないか！

「西村先生おはようございます」

「西村先生おはようなのじゃ」

「鉄じ…西村先生おはようございます」

「スネ…鉄人おはようございます」

「木下、おはよう。それと石井と吉井、今鉄人と呼ばなかったか？」

ちっバレたか。ならここは「ははっ気のせいですよ」

これでどうだ！

「えっ違うんですか？」

「吉井ですら知っていることも知らんのか!？」

うん、やっぱり人をいじるのは面白いな。

「ジョーダンですよ」

「まあいい。四人とも他に言う事はないのか？」

「西村先生遅れてすみません」

「西村先生遅れてすまぬのじゃ」

「「今日も肌が黒いですね」」

「お前らは遅刻の謝罪よりも俺の肌の色の方が重要なのか」

ぬぬ、違うとな？ならば何だというのだ

「そつちでしたか、すみません」

「そつちか」

「まあいい。ほら、振り分け試験の結果だ」

「「「「ありがとうございます(なのじゃ)」」」」」

「ところで吉井に木下弟、どうしたんだ一体？」

「「何かあったんですか？(あったのかの?)」」」

「俺は五回も答案を見直したが間違いはどこにもなかった。二人ともまさかカンニングでもしたのか？」

「そんな事しませんよ。という事は…」

「ああ、二人ともＡクラス入りだ。おめでとう」

「本当ですか？」

「疑うならこの封筒の中を見てみる」といつて渡された封筒の中に入っていた紙を見るとそこにはでかく
かところ書かれていた。

「石井拓馬、Ａクラス」「木下優子、Ａクラス」「木下秀吉、Ａクラス」「吉井明久、Ａクラス」

四人の幼馴染みの最高クラスでの生活が今幕を開けた。

第二問（前書き）

評価とお気に入り登録ありがとうございます。

第二問

Aクラスの扉を開けてみるとそこにはまるで高級ホテルの様だった。

「高級リクライニングシートに個人パソコン。ちょっとやりすぎじゃない？」

「僕もそう思うよ。なんで一人一人に個人冷蔵庫があるのさ」

「ワシもこれはちょっと…」

「でもなんでここまでする必要があるのかな」

「たぶん、この設備目当てに勉強する奴狙いだろう。まあ、このクラスにこうして四人で来れたからもう勉強する気はないけどな」

「そんな事言っていないでちゃんとしなさい」

まあ本当は試召戦争をしたかったがAクラスでは無いだろうし、せいぜいこのメンツでの学校生活を楽しむとするかね。

「みんな席が離れちゃうけどまあしょうがないか」

「そうね、でも同じクラスなだけましじゃない？最悪あなたとウチの愚弟はFクラス行きだったかもしれないし」

「まあそう言ってるなや優子。秀吉だって好きな演劇には俺たちですら負ける程夢中になれるし、明久だっていざという時の集中力と行動力は目を見張る物があるぞ」

「そう言ってくれて嬉しいのじゃ」

「よしてよ拓馬。照れるよ」

「まあ俺にも誇れる物があると思いたいかな」

そう言っただけ俺は大型のボストンバッグからとあるライフルを取り出す。あ、言っておくがエアガンだからな。

「またそんな物持ってきて。アンタよく懲りないよね。何回没収されてるのよ」

「ていうか、ここはAクラスだし、あいつらが襲ってくる心配はないと思うけど」

ふん、やっぱり明久は甘いな。

「それでも備えあれば憂いなしと言うだろう。それに銃は俺のアイデンティティを構成するものなんだよ。これが無かったら俺は俺じゃない」

そういつて俺は銃の整備に没頭する。ちなみに俺の好きな銃はM1ガーランドだ。今整備しているのもガーランドだ。トンプソンもBARもいいと思うがやっぱりガーランドが一番だ。

「それでは皆さん席についてください」学年主任の高橋先生だ。学校内では高橋女史と呼ばれてたりする。

「こうなったら拓馬は誰の言うことも聞かないから席に戻ろうか」

「そうね」

「うむ、そうじゃな。こやつがこつなったら何も聞かぬし、席に戻ろつかの」

「それでは廊下側から自己紹介をして下さい」

第二問（後書き）

ちょっと切り方が悪いが気にしたら負けだと思っている。

わからない所はググってください。

この物語を読んでいる皆様をお願いします。

うp主は皆様の意見をものすごく待っています。「こうした方がいい」だとか、「この小説はマジないな」とか、そういう意見でもいいです。とにかく、積極的に感想や意見を言ってもらえるとありがたいです。

あと、アンケートをとりたいと思います。秀吉とくっ付けるオリキヤラを考えているのですが、性格が決まってません。次の三つの内のどれがいいかを感想にてお答えしてもらえると幸いです。

- 1、ツンデレ
- 2、天真爛漫的な（具体的に言う超電磁砲の佐天みたいな）
- 3、ロリキャラ

第三問

「くま、拓馬！」

「あつ、悪い明久、夢中になりすぎた」

「まったく、拓馬の番だよ」

はあ、俺の番か。俺的にはこの四人と過ごすだけでいいから自己紹介は必要ないと思うがなあ。

「石井拓馬だ。その明久と優子と秀吉は俺の幼馴染だ。以上」

そう言つて座ると周りから妬みの視線が俺に突き刺さる。はつきり言つてこれはちよつとムカつく。

「ああそうだ。明久、優子、秀吉に手を出す奴は……」

そういつてさっきの銃を取り出し、「潰すから（ニコツ）」

これで手を出す奴は居ないだろう。ふん、計画通り（キリッ）さて、せっかくこつちに意識を戻したんだし、他の奴の自己紹介でも聞くか。って、次秀吉じゃん。て言うか、みんな俺の近くじゃん。

ふむふむ、秀吉が俺の後ろで明久が俺の前でその横が優子と。って優子は何でわざわざ明久の隣にしたんだ？ああそうか、優子は明久の事が好きなのか。今度聞いてみよう。

「わしは木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。特技は……」「声帯模写だ」わかつてはいるが、秀吉の声帯模写似すぎだろ。鉄人の声とか。

「ちなみにわしは男じゃから間違えるでないぞ」秀吉つて中性的な顔立ちしてるから姉の優子よりも告白が多いんだよな。主に男からてか、あいつ女子から告られた事あるのか？まあ、その内あるだろう。多分……。ま、もう聞きたい奴もいないし、続きをするか。

そんな事をしてる内にお昼になっちまった。いやー時間たつの速えーな。さて、アイツらと昼飯でも食うかな。て、思えば近くにメンツが全員そろつてるっていうね。まったく便利な物だ。

「明久に秀吉、それに優子にその……」

「工藤だよ。工藤愛子。そういう君は…確か石井君だったね」

「ああ、そうだ。お前も一緒に飯食うか？」

「えっ、いいの？」

「ああ、いいさ。お前等もいいよな？」

「ええ、いいわよ」

「うん、拓馬がいいなら僕もいいよ」

「そうじゃな、人数は多い方がいいからのう」

「だそうだ。工藤、一緒に飯食うか？」「うん。なら、そうさせて

もらうね（ニコッ）」

か、可愛い…」

「拓馬、ニヤけてるわよ」ハッ、俺としたことが、なんという失態。

「それにしても、石井君「拓馬でいい」拓馬君優子にもててだね」

「別にそんな事言われても別に動じたりはしないぞ」

「なんで？」「だって優子に中学生の時告ったら「アタシ好きな人

がいるから無理」って断られたから。ま、誰かはだいたい判ったが

な。それより、飯喰おうぜ」

第三問（後書き）

切り方がアレな気もする。

第四問（前書き）

投稿遅れてすいません。

オリキャラの案はまだまだ余裕がありますので感想にて言ってくださると恐縮です。

第四問

「まずは全員弁当の準備だ。持ってきていないやつはいるか？」

「ボクは今日学食に行こうと思っていたからもってきてないかな」

「そんな工藤には俺特製の弁当を分けてあげようジャマイカ」

「えっいいの？」

「味は保証済みだ」

「じゃあ頂くね」

パクッ「おいしい。てか、拓馬君料理も出来るんだね」

「明久直伝の味だ。まずい訳がない」

「そうなんだ。という事は、吉井君も「僕も明久でいいよ」明久君も料理出来るの？」

「そうよ。このアタシが味を保証するわ。で拓馬、アタシの弁当食べてみない？」

「そうだな」パクッ ガタガタ

「拓馬君どうしたの!？」

「はあ、やっぱり直ってなかったのね」

「そんな事言つてないで早く救急車をよんで！」

「えっ、まさか、やりすぎた！」あれ、おかしいな。だんだん意識が…バタッ ピーポーピーポー

「知らない天々」拓馬君！？起きたの！？」

「なあ愛子。人のセリフは最後まで言わしてくれ。で、俺が倒れたのは確か優子の弁当が辛すぎるのと苦過ぎるからだった筈だが、その後なんかあったか？」

「ううん、特にはないよ」

「なら、ちょっと寝さしてもらっわ」

「拓馬君」

「なんだ」

「もう心配かけさせないでよね」「このふくれっ面、マジ可愛い。」

「ちょっと拓馬君、話聞してるの？」

「ああ善処はするさ。じゃあおやすみ」

「うん、おやすみ（ニコッ）」やべ、マジ笑顔可愛すぎるだろ。反則だ反則。そして俺は眠りについた。

その二日後、霧島からメールが来た。なんだろうと開けてみると「成績を教えて」これだけ。寂しすぎるだろ。まあ得点を教えたよ。隠す程じゃないしな。ま、今日退院できるし。

さて、退院まで銃の整備でもしてますか。

第四問（後書き）

オリキャラの順位は、一位：2

二位：1、3

となっております。皆様の回答をお待ちしております。

今後、禁書目録からキャラを持つてくる予定です。
それでは。

第五問（前書き）

ちよつとシリアス。

第五問

そして俺は教室にきたんだが「拓馬君、Cクラスが戦争を仕掛けて来たよ！」

来て一番戦争ですよ。やったね。マジ嬉しい。

「でも開戦理由が優子がCクラスを豚発言したらしいんだけど」

何、こいつは聞き捨てならないな。

「優子がそんな事を言う筈がない」

ていうか、さっきから視線を感じるんだが。そういつて探していくと、秀吉の視線だった。ふむ、あの目は何かやましい事や後ろめたい事がある目だな。聞いてみるか。

「秀吉、ちょっと二人だけで話しあおうか」

「う、うむ」

「ところで秀吉、お前何かされたのか？」

「い、いや、特には」

「隠すな。別に怒ったりはしないから」

「そ、そうか。…ワシは悔しいのじゃ！Aクラスを貶めるような事はしたくなかったのじゃ！でも、雄二がワシに「男だったら友達」

頼みぐらい聞いてくれるだろ？」など言ってくるのじゃからワシは聞かざるを得なかったのじゃ。ワシは…もう皆に会わせる顔がないのじゃ」

なるへそ、そういうカラクリだったのか。

「秀吉、心配すんなって。別にクラスの奴らはお前の事嫌ったりなんかしねーよ。ただし、優子と霧島には事情を話すがな」

「う、うむ、判ったのじゃ（グスッ）」

「おいおい、男なら泣くなって」

さて、坂本を本気でボコすとするか。ついでにFクラスも。

優子たちに事情を話すとFクラスと試召戦争を言うと言ってくれた。

そして、開戦一時間前

「では、作戦会議をはじめるわ。まず、突撃隊の隊長に石井。副隊長に吉井。10人をつけるわ。次に、遊撃隊。これは、攻めてきた敵を潰す第一次防衛線よ。これには、愛子が隊長で、保体の得意な子を10人つけるわ。残りの皆は近衛部隊。では、以上。解散。拓馬、吉井、期待してるわよ」

「ふん、俺一人で潰すさ。今回はいつになくキレてるからな」

「僕もだよ」

キンコーンカーンコーン。

開戦の狼煙が今上がった。

第五問（後書き）

おかしい所があったら教えてください。

第六問（前書き）

遅れてすみません。

親にパソコンを没収されました。

こんな具合で時々更新が遅れるかもしれません。

第六問

「さて明久、Are you ok?」

「うん。拓馬、行くよ」

「よっしゃ。Let's party! 総員俺たちに続け!」

さて、Show timeだ。

「Aクラス石井と」

「吉井が」

「Fクラス18人に勝負を挑む。先生、許可を」

「承認します」

「「試獣召喚!」」

Aクラス 石井拓馬&吉井明久 日本史 618&319点 VS

Fクラス モブキャラ 60点×18

「幾ら点数が高くてもしっかりは18人。負けるはずがない」

など聞こえてくる。ふん、甘いな。

「悪リイがこつから先は一方通行だア。尻尾巻いておとなしく補習室に行きやがれエ」

さて、腕輪を使用するか。

「明久、オレが突っ込むからお前は敵の掃討を頼む」

「うん、わかった」

「腕輪発動！」

そう言つと俺の召喚獣の右手が光り出した。

そこから出てきたのは俺用と思われる小型モニター。

中を見てみると…これは戦闘機の搭乗画面か？なるほど、こつから操縦すると。では、いっちょ絶望というものを奴らに見せるか。

腕輪によって出現した隼

「敵発見」

ガガガガガガ 隼の機銃掃射によって…

「ぎゃあああああ」

断末魔が聞こえてくるぜ。心地いい。一回で5人葬り去ったか。そんな時、トトトトトト。

「戦死者は補修つつつつ！」

「ぎゃああああ！」

それを見てこっちの奴らはほとんどん士気が上がってる。

だけど早く突っ込みたいという声がちらほら。明久に抑えてもらってるけど。

そして二回目の攻撃は…爆撃でいいか。

ガチャ ヒュウウウウ ドギヤアアン

「ぎゃあああ！」

これで7人葬ったか。そろそろコイツにも限界があるだろうし。

「総員突撃ッ！上空から援護するッ！」

「了解！」

やっぱり士気が下がってるからやりやすいな。6人なんてあっという間だ。

「さて、次はFクラスの代表サマかア」

オレの全力をもってボコボコに潰してやんよ。

第六問（後書き）

おかしい所があったら指摘よろしくです。

うp主からの質問：好きな歌手といえば？うp主は水樹奈々です。

答えてくださる方は感想にて。

ではでは！

第七問

どうも、こんにちは。石井拓馬です。今いる場所はFクラス前です。てか、ちやぶ台邪魔。戦況はこちらの圧倒的有利です。てか、この口調疲れた。元に戻そう。さて、敵本陣に殴りこみをさせてもらうかね。

ガラガラッ

「はあい、Fクラスの諸君。オレが直々に潰しに来たよ」

「僕は今最高に怒っているからね。手加減は出来ないと思うよ」

「ただか二人で何ができる。お前ら、このリア充に死を」

「コロスコロスコロスー!!」

「はあ、怒りに身を委ねているようじゃいつか身を滅ぼすぞ」

タンタンターン

小気味いい音が鳴り響く。

それと同時に

Fクラス 60点×24 60点×20

になっていた。

「まずは四人戦死つとやっぱガーランドは使い勝手が良いな。ババアまじG」

その隣では

「はあああー!!!」明久がバツバツと敵をなぎ倒してる。てか、あいつ操縦上手すぎじゃね。CQCさせられるんじゃないね

Fクラス 20人 17人

さて、オレも行きますか。

タンタンタンターン

「ぐわああ!」

Fクラス 17人 12人

バシユウウ ドギヤーン

「ぐわああ!」

Fクラス 12人 6人

ここまでくると、戦争というよりむしろ虐殺だな。止める気は無いけど。お、残りの奴等も来たな。

「みんな、後の六人は頼んだ。さて明久、坂本をボコすぞ」

「うん」「Aクラス石井と」

「吉井が」

「Fクラス坂本に勝負を挑む」「くッ、試獣召喚^{サモン}！」

Fクラス 坂本雄二 286点 VS Aクラス 石井拓馬&吉井
明久 413点&228点

「ふん、余裕だな」

タンタンターン

Fクラス 坂本雄二 253点

「ちっ、後少し、あと少しで…「甘い坂本」なにッ？」

「高火力の奴を頼ってるんだろうが無駄だ。うちの遊撃隊によって潰されてるさ」

「畜生！」

「さて坂本、オレたちを怒らせた事、後悔してもらおうか」

「はあああー！！！」

ガギイイン！

Fクラス 坂本雄二 153点

タンタンタンターン

Fクラス 坂本雄二 53点

ターン

Fクラス 坂本雄二 0点

Fクラス戦がここに終結した。

第七問（後書き）

戦闘描写が単調な気がする。

お知らせ：感想受付を制限なしにしました。気軽に感想をください。

オリキャラの回答はまだ受け付けています。是非。

第八問（前書き）

いつものより少し短いです。

第八問

「さアて、戦後交渉と行こうじゃないか。なア坂本サンよオ」

「くッ、何が望みだ」

「そうだな…こっちの代表三人の言うことを聞くこと。それを飲むのであれば、設備のランクダウンは見逃していい。これで良いよな、霧島」

「…それでいい」

「じゃあまず明久から」

「僕の要求は…秀吉と優子さんに謝れ」

「…わかった。秀吉とそれに木下姉、本当にすまなかった」

「気にするでないぞ雄二よ」

「そうよ。アタシ達もう怒ってないし」

「じゃあ次はオレかな。オレの要求は…今後二度と明久たちに手を出すな。おk？」

「わかった」

「で、最後は…霧島だ」

「…雄二」

「なんだ翔子」

「…私と付き合って」

あ、みんなポカーンとしてる。ま、それもそうか。だって優等生とチンピラだもんな。

「お前、まだ諦めてなかったのか」

「…私には最初から雄二しかない。さ、今からデートに（グイッ）」

「…拒否権は」

「…ない」

「は、放せ！」

ツカツカ…しばしの無音…

「な、なあ愛子。ちょっと話があるんだが」

「何？拓馬君」

「実はだな…その…」

「もう、何？」

「そ、そのだな…今度の日曜一緒に買い物に付き合ってくれないか？」

「え？ま、まあいいけど」

「あ、ありがとう」

いよっしゃあー！作戦成功！ああ、日曜日が楽しみだ。待ちどうしいね。

第八問（後書き）

オリキャラのアンケートをもう一回募集します。

「秀吉とくつつけるオリキャラ」です。

うp主の候補は

1：ツンデレ（うp主的にこれが一番よさそうだなと思う）

2：明るい女の子的なもの（例えば佐天みたいな）

3：クーデレ的な（難しそうだな…）

皆様の意見お待ちしております。（ペコリ）

回答は感想欄にて。

第九問：石井拓馬の場合（前書き）

今回と次回でカップリングをさせます。初めてサブタイトルを作りました。

第九問：石井拓馬の場合

おはようフェルプス君。石井拓馬だ。今日は愛子との買い物が待っている。だが：遅刻だあああ！

「悪い、愛子。遅れちまって。待ったか？」

「ううん、そんなに待ってないよ。で、今日は何を買うの？」

「そうだな、今日は服とかを買おうと思っている」

「エアーガンを買うと思っていたけど」

「それは別の場所で見えるし、今日買う必要はないしな。仮にも女子とエアーガン買う訳にも行かないし」

「ふーん、で、まず何の服を買うの？」

「コートでも買うかな」

「じゃあ、これなんてどう？」

そういつて渡されたのは白のコート。

「うーん、白か。オレはどちらかというと地味っぽい色が好きなんだがなあ」

「じゃあこれは？」

そういつて渡されたのは茶色のコートと紺色のコート。

「オレはこれにする」

結局オレは紺色にした。帝国海軍万歳！

「なあ愛子、ゲーセンに行かないか？」

「いいよ」

ついですぐに始めてみたのが有名な大の人

二人でナ ト・オ ・ナ ツとか叩いた。音ゲーは苦手だという事がわかった。

次にFPSをした。ま、余裕だったけど。

「疲れた。どうだった、愛子？」

「うん、楽しかったよ（ニコッ）」

可愛すぎだろ。

「ちょっと大事な話があるんだが」

「いいよ」

「じゃあここで言うぞ。オレは、お前が好きだ。だから、オレと付き合ってくれないか？」

「えっ？今なんて？」

「だから、オレと付き合ってくれ」

「ボクで…いいの？」

「ああ、構わないさ」

「ボク、男っぽいよ？」

「それが？」

「スタイルも悪いし…」

「そんなの二の次」

「じゃあ……ボクでよければ」

「それは、okという事か？」

「そうだよ」

いよっしやあああ……！！！！！！

第九問：石井拓馬の場合（後書き）

まず主人公のくつつけ完了。

アンケートの案を絞ります。

1、ツンデレ

2、天真爛漫

回答は感想欄で。

第十問：吉井明久並びに木下優子の場合（前書き）

今回は明久と優子をくっつけます。

第十問：吉井明久並びに木下優子の場合

「ねえ明久、今度の日曜日暇？」

「そうだけど、それがどうかしたの？」

「買い物につきあってくれない？」

「いいよ」

そして日曜日

「遅れてごめん。待たせちゃったかな？」

「いいえ、待ってないわ。じゃあ行きましょ」

「で、今日は何を買うの？」

「今日はね、ちょっとゲームを買おうかと思ってるの」

「どんなの？」

「メタ ギアソリ ド ピー ウォーカーと言うゲームなの」

「ああ、それなら僕も持ってるよ。今日買ったら一緒にしない？」

「ええ、いいわよ」

ゲームを買って

「さて、ゲームも買ったことだし、公園に行きましょうよ」

「うん。じゃあそこでやろうか。ちやうど持ってきてるし」

「そうね」

ゲーム内、明久視点

さて、どの武器で行こうか。僕はC A Wってフルオートショットガンが好きだけど戦車だしなあ…とりあえずカールグスタフは持っていくとして…対人戦は優子に任せよう。護衛武器にC A Wで、もう一つは…L A Wにしよう。さて、s h o w t i m eだ。

ゲーム内で

「ああもう、敵兵と戦車の機銃がウザイ!!」

そういつつも敵兵をM 1 6 A 1で射殺していく。明久は敵の戦車の燃料タンクにロケットを正確に当ててる。どうなったらああなるのよ。

そうこうしてる内に戦車を撃破したわ。

「ふう、これで戦車撃破だね」

「正直機銃がマジウザいわ」

「あれは僕も正直ちょっと…」

「ねえ明久、ちょっと重大な話があるの」

「なに？」

「明久：アタシ、木下優子は、吉井明久の事が好きです。だから付き合ってください」

「へ？今なんて言ったの？」

「もう、恥ずかしいからあんまり言わせないでよ。だから、アタシと付き合ってくださいって言ってるの／／」

「…僕で良いの？」

「いいわよ／／」

「僕、頭悪いよ？」

「そんな些細な事気にしないわ／／」

「じゃあ、僕で良ければ・・・／／」

「それはオツケーということかしら？」

「うん、そうだよ／／」

「アリガト。じゃあ今後もよろしく」

第十問：吉井明久並びに木下優子の場合（後書き）

ネタが無かったorz

オリキャラの案が決定しました。

結果は………2の天真爛漫です。

皆様、回答ありがとうございました。

第十一問

どうも、石井拓馬だ。昨日は念願の恋人が出来た。なので途中でバツタリ会ってから一緒に登校しているんだが：

なんか男どもが追っかけてきた！後ろからカッターとか飛んでくるし！

「愛子、もしあいつ等ボコしても正当防衛だよな」

「そう…だと思っ…」

「よし、ならお前も殺るか？」

「じゃあボクも手伝っよ」

「じゃあお前にはこれを貸すよ」 チャキッ

そう言っただけで貸したのはM1A1トンプソン。

ガーランドは8発しか撃てないから愛子には無理だろうし、トンプソンなら弾をばら撒くこともできるだろうし。

タタタタタタターン

愛子が絶妙な援護射撃をしてくれる。素人にしては上手いな。

ならオレも

タンタンターン

「くぐうあー!!」

これで三人撃破。あと三人は…

愛子が既に撃破。

「どうだった、初めて撃った感想は」

「相手には悪いケド爽快感があるね」

「じゃあそれお前に貸すよ。弾が無くなったら言ってくれ」

「えっ、いいの？」

「仮にも恋人だぞ？そんなことぐらい当たり前だっつーの」

「アリガト（ニコツ）」

「二人とも、お熱いね」

「見てるコツチまで熱くなってくるわ」

「お前ら何時から見てたんだ？」

「《愛子、あいつ等ボコしても正当防衛だよな。》から」

「それってほぼ全部じゃねーか！まあいい、ところでお前ら付き合ってたの？」

「な、何を言ってるんだよ拓馬。そ、そんなわけないじゃないか！」

「その割には優子がものっそい悲しそうにしてるんだが」

「え、あれってウ、ウソだったの？（泣）」

「え、いや別にそんな訳じゃ…」

「ホント？（涙目＋上目遣い）」

「グハッ」

「あ、明久…」

「まあ、確かにあれは破壊力抜群だろうね」

「おい明久、起きろ」

「ハッ」

「で、結局お前ら付き合ってる」と

「／／」

「大丈夫、オレはあいつ等にリークとかはしないって。で、武器貸そうか？二人に」

「「ホントに？」」

「ああ、いいさ。ただし、ガーランドは持っていくな。オレの銃だ」

「わかったよ（わ）」

そういつてまず明久が取り出したのはBAR。あれ以外と重かった筈なんだが…

次に優子を取り出したのはM1911A1コルトガバメント。女子には使いやすいだろう。

「じゃあありがたく借りるね」

「おう」

第十一問（後書き）

作者の趣味全開でやってみた。後悔はしていない。
次話、新任教師と転校生が…

第十二問（前書き）

遅れてすみません。（ペコリ）

第十二問

どうも、石井拓馬だ。今はS H Rの時間で先生を待ってるんだが高橋女史がいつまで経ってもこない。どうしたんだ一体？

ガラッ 「おはよう諸君、待たせたな」

そこに現れたのは…ビッグ・ボスだった。って、ビッグ・ボスうう！？

「高橋女史は今日から教頭になった。その代わりに担任になったジョン・スネークだ。よろしく」

「質問です先生」

「なんだ」

「C Q Cってできますか？」

「君、ちょっと来てくれないか？」

「なんですか？」

「君は何故C Q Cを知ってるんだ？誰から聞いた？」

「いや、聞くも何もあなたと瓜二つの人物が主人公のゲームがいましてね。それで聞いたんですがまさかホントとはね。モチロン、バラシませんよ」

「本当か？」

「モチロンですよ。・愛国者達・に消されたくはありませんからね」

「そこまで知っているのか。まあいい、席に戻れ」

「了解、ボス」

「さて、CQCが出来るのかという話だがCQCを知らない者もいるだろう。CQCとは…（以下略）」

「で、他には質問は？」

「好きな食べ物は？」

「ボンカレーNEOだ」

「年は幾つですか？」

「47だ」

「趣味は？」

「タバコを吸うこと」

…質問タイムはまだまだ続いていく…

第十二問（後書き）

いや、ホントに遅れてすいません。

グランツォリスモにハマってました。

ランエボかけえええとか思いながらやってました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1588z/>

バカと軍事オタクと召喚獣

2011年12月28日22時51分発行